

山口県下関市の川棚温泉にほど近いひっそりとした山林の一軒家で、6月に公開予定の映画「ヘレン・ケラーを知っていますか？」の撮影が行われた。目と耳に障害を持つ県内在住の女性(74)をモデルにしたこの作品で、俳優たちに手話を指導しているのが、手話通訳士の綾城明美さん(57)(山口市鑄銭司)だ。37年にわたる障害者支援の活動と映画を通し、「相手を思いやる心を伝えたい」と話

# 手で伝えたい思いやり

ば。そのたびに手話を教えるのが私の役目なんです」  
映画のモデルになった女性は20歳代で視覚と聴覚を失った。1964年、全国の重複障害者に呼びかけ、福祉の充実を訴える会を結成した。しかし、身の回りの世話をして

くれていた母親が75年に他界。以来、雨漏りがするわらぶきの一軒家で、冬場は猫を抱いて暖をとる生活を続けていた。  
綾城さんが、その存在を知ったのは、今から約30年前のこと。一緒に活動していた仲

間が教えてくれた。しかし、当時は支援の手をさしのべるまでには至らなかった。  
3年半前、女性が1964年に作った重度障害者を取り巻く状況を訴える点字冊子と、その生き方を多くの人たち

ちに知ってほしいと思い、初めて女性の家を訪ねた。最初は「そっとしておいてほしい」と拒まれたが、映画会社の社長とともに説得。女性も次第に心を開いていった。  
綾城さんにとって、手話は幼いころから身近な存在だっ

「触手話って、なあに？」  
「手話を手で触って会話するんですよ。ワタシは、こうね。アナタは、こう……」  
主役の小林綾子さんが、不登校の中学生を演じる役者に手話で語りかけるシーン。カメラや照明スタッフに紛れて、綾城さんが、じっと演技を見守る。「本番直前に、せりふが変わることもしばしば



映画撮影で出演者に手話を指導する綾城さん

た。実家の近くにろう学校があり、よく生徒たちと野球をして遊んだ。  
「当時、手話といえは、障害を持つ人たちの間で使われる会話の手段という認識で、社会と障害者を結ぶものではなかった」  
63年、全国初の手話サークルが京都市に出来たのをきっかけに、障害者の権利を守ろうという運動が全国に広がり、69年には山口市などで初めて市民対象の手話講習会が開かれた。山口大の職員だっ

## 障害者支援37年 6月公開映画で手話指導



た綾城さんも参加し、受講生約20人と手話サークルを設立した。  
自分たちの熱い思いとは裏腹に、周囲の反応は冷ややかだった。手話とはどんなものかを知ってもらおうと、客でにぎわう喫茶店を選び、わざわざ仲間と手話で会話したこともあった。  
約15年前に国の手話通訳士の資格を取得。法廷通訳を務めながら、県職員の障害者別枠採用、盲導犬普及、県聴覚障害者情報センター建設など、数々の要望活動の先頭に立ってきた。  
10歳の時、交通事故が原因で聴覚を失った妻の久留美さん(51)は「ろう者でしか分からない心理を教えてください」存在。社会で障害者が虐げられてきたことへの憤りと、家

族の支えがエネルギーだ。  
\*  
高齢の重複障害者の中には、未就学のため読み書きが出来ず、周囲とコミュニケーションがとれない人が少なくない。綾城さんは、こうしたお年寄りを対象に月1回、山口市内で手話教室を開いており、NPO法人化するつもりだ。  
県内で先行上映される映画の中で、女性は最後に少年と一緒に社会に飛び出していく。「映画のように、女性が人間らしく生きていけるよう、これからも支援していきたい」  
細川紀子